
七つの花片

喜怒 泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七つの花片

【Nコード】

N2833L

【作者名】

喜怒 泉

【あらすじ】

これは、ある呪われた少女の物語の始まりの話である。

プロローグ

ゴオオオオオオ・・・

まるで、大型肉食獣がうなり声を上げたかのような、機械音。

いや、機械音に混じって、本物の獣のうなり声が聞こえてくる。

辺りは、とても暗い。その闇のなかに、不気味に光る赤い目が数十個ある。

獣たちは、もう普通の生物とは思えないほど、姿かたちが尋常ではなかった。

それぞれ、二つ以上の動物を合成したような風貌である。

ライオンのように鋭い牙を持ったものもいれば、亀の甲羅のような肌を持つ獣もいる。

そんなおぞましい獣たちの首には、鉄でできた首輪がかかっている。

獣たちはなおもうなりごえをあげている。

そこへ、まったくミスマッチな、甲高い声が飛び込んできた。

「うるさい、うるさい、うるさいー!!」

獣たちは、いっせいに黙った。

甲高い声はつづく。

「まったく……。ただでさえシナリオの準備ができなくて、イライラしてるのにい。

その上この騒ぎ。いらつくー。」

甲高い声の主は、自分の後ろにあったベットに足をなげだした。

顔は布で隠れていてみえない。

肩にかかっている髪は、混じりけのない金髪である。

歳は、二十歳ぐらいだろうか。

胸のあたりがふくらんいることから、甲高い声の持ち主が女性ということが分かる。

体のあちこちから、チューブが伸びている。

そのチューブの先には、いろいろな機械がつながっている。

女性はうざったそうにチューブをはらいのけると、枕を自分の方に引き寄せた。

女性は、拳をつくると枕に力任せに、叩き込んだ。

どうやら、やり場のない怒りを枕にぶつけているようだ。

そこへ、一人の男性が入ってきた。

男性は、喪服を着ており、背中まである髪を無造作に束ねている。

「・・・アムール嬢？何をなさっているのです？あまり、力むとお体に障りますよ。」

男性は、枕に何度も拳を叩き込んでいる、女性――アムールに言った。アムールは、

「何よー。別にいいじゃない。自分の体のことは、自分がよく分かっているわよお。」

と、口をとがらせた。男性は、ため息をつき、肩をすくめて

「この前はりきって？例？の者を探して、ぶっ倒れたのは誰でしたか？」

と、言ってアムールをじっと見た。アムールは、さっと顔をそらす。

男性は、その様子をみて深くため息をついた。男性は、口を開いた。

「まあ、小言はあとでたっぷり言わせてもらいます。」

それより、？例？の者が、見つかりました。」

男性は、後ろにいていた？者？を、アムールの前に出した。

アムールは、？それ？をみて、

「きゃははっ。見つかったんだあ。お手柄だよ、ギル。銀色の髪に、赤い目。」

透き通るような、白い肌の女の子。・・・

うん！条件に、ぴったし。あとは、記憶を？アレ？にいれて・・・。

ギル、？計画？は分かってるよね。

だから、あとお願い。」

男性——ギルは、

「はい。仰せのままに・・・。」

と、言って少女を抱きかかえ、部屋の奥にきえていった。アムールは、

——準備は整った。ようやくこの？地下室？からでれるのね・・・

アムールは、ベットに横になり、やがて眠りに落ちた。

プロローグ（後書き）

わけの分からない話で、すみません。できることながら、最後までおつきあいください。

（始まり）

ドゴッ

「つてえ！！」

少女は、ベットから落ちた。

頭から床に落ちた少女は、打ったところだけ、プツクリと腫れている。

少女は、頭をさすりながら起き上がった。

「こ、ここだよ。ていうか、なんでここにいるんだ？」

少女は、銀色に光る髪をかきあげた。

だが、なぜか右眼だけは、髪を下ろして隠している。

そして、赤く燃えるような片眼で、辺りを見回した。

少女は、今まで寝ていた自分のベットの横を見た。

少女は、白く透き通るような腕を伸ばして、ベットの横にある？物？に、手を伸ばした。

？それ？は、？大剣？だった。

少女は、それを手に取り、よく観察した。まず、鞘から？大剣？を

取り出した。

刀身は、深海のように深い青だった。

形は、少しばかり反ったような形だった。柄の部分は、かなり頑丈のようだ。

少女は、立ち上がって剣を軽く振ってみた。

その時、ガチャリと音がして、ドアが開いた。

ドアの向こうには、豪華な服を着飾り、白い髭を生やし、

王冠をかぶった男が入ってきた。

「……見るからに、このジジイ……王だな？ つーことは、ここ……城か!？」

と、少女があれこれ考えているうちに、王が口を開いた。

「おはよう。!! お嬢さん、その大剣が、持てるのかい!?!? ……」
「すごい力だな。」

少女は、自分のことをじろじろ見る、王にむかついた。

「おい、初対面のやつに、自己紹介もしないのか?」

と、ぶっきらぼうに言った。王は、少しびっくりしたような顔をしたが、やがて微笑し、

「これは、失礼。私の名前は、クライド・デュセル。」

君は、見るからに女の子のようだが・・・なまえは？」

と名乗った。少女は、

「・・・ご察しのとおり、オレは女だ。名前は・・・」

と、名前を名乗ろうとした。だが、

「——アレ？オレの名前って・・・なんだったっけ？・・・うそ
だろ！？」

自分の名前が分からない！！

その時、少女は自分の手の甲に書いてある、メモに気づいた。

「——あ？何だこれ？・・・『お前の名は、ゼロだ』？」

オレの名前は、『ゼロ』か。まあ、ないよりマシか・・・

少女——ゼロは、黙りこくってしまった自分を見つめている、クライドに言った。

「名前は、ゼロだ。」

クライドは、ニッコリ笑うと

「ふむ・・・。ゼロ、か。よし、それでは、ベッドの隣にある服に着替えなさい。」

・・・今夜は君の歓迎会なのだから」

ゼロは、クライドの言っている意味がよくわからなかった。

———歓迎会？オレの？どういうことだ！？

クライドは、状況がうまく飲み込めてないゼロを残して、部屋から出て行った。

く始まりく（後書き）

うくん。やっぱ長いですねえ。でも、最後まで読んでくれたら、すごくうれしいです！！

（歓迎会）

ヒュルルルルル…ドーン

窓の外が、なにやら騒がしい。ゼロは、顔をしかめた。

———あんのクソジジイ。部屋を出てったとたん、召使共をわんさかとよこしやがって。

その上、ドレスなんぞを着させやがってえ。コルセットで、内臓でるつつうの。

ゼロは、わけの分からないことばかりで、イライラしていた。

———なにが、『君の歓迎会なのだから』、だ。ていうか、何の歓迎会だよ？わけ分かん。

だが、ゼロは気づいていなかった。

？歓迎？という言葉に、少しの心地よさを感じていたことに…。

そのとき、バン！！という音と共に、ドアが勢いよく開いた。

そこには、黒髪の長髪に青い目で、黒いマントに身を包んだ少女が立っていた。

少女は、黒髪の長髪をを頭上で、結っている。少女は、にこやかに笑うと、

「さあ、準備は整いました！貴方が、？女王？となる記念すべき日

です!!行きましょうっ!!」

ゼロは、少女の言っている意味が分からなかった。

———は??女王??オレが?冗談じゃねえ!!」

ゼロは、歩き出そうとした少女の前に、足を出した。案の定、はでにすっ転んだ。少女は、

「う、うう…」

と、うめきながら起き上がった。ゼロは、その顔を見て驚いた。

「お、おまえ、男!?まじ?」

少女——少年は、ゼロの迫力にびっくりし、

「あ、う、えと、その、……はい、ぼくは男です…」

と、しどろもどろでいった。ゼロは、少年の顔を、まじまじと見た。

———よく見れば、男に見えなくもない。

少年は口を開いた。

「あの、もしかして、ぼくのこと、女だと思ってました?」

ゼロは、

「ああ、思ってた。」

と、即答した。がっくりと肩を落とす少年。少年は、

「そんなことより、早く広間へ急ぎましょう。皆様が、お待ちです。」

と、気を取り直し、ゼロを連れて行こうと、歩き出した。

またもや、少年の前に足を出すゼロ。

はでにすっ転ぶ少年。

「な、何するんですか！」

少年は、叫んだ。額が赤くなっていることから、額をかなり強く打ったようだ。

ゼロは、平然としている。

「自分の名前も名乗らんのか？ 人に対して、失礼だぞ。」

と、言った。少年は、きょとんとして、

「あれ？ しませんでしたっけ？」

と、首をかしげる。

「してねえ！！」

ゼロが、叫ぶ。少年は、頭をカシカシとかきながら、

「それは、すいません。ぼくは、カイです。あなたの世話役です。」
と、話した。ゼロは、途中までふんふんと、うなずいていたが、『世話役』というところで、

うなずいていた、首が止まった。

「は？『世話役』？なんで？」

「『なんで？』て、いわれても、あなたは今日から『女王』なんですよ？」

当たり前じゃないですか」

ゼロは、もう驚かなかった。すべてのつじつまが、あったからである。

大勢の召使。？女王？になる準備と言う意味。そして、カイと言う世話役。

次の瞬間、ゼロは脇にあった小刀を引き抜くと、切っ先をカイの首にあてた。

その動き、風のごとく。

カイは、まったく動けない。

「いいか、オレは女王になる気は、全くもって、ない。だが、？今？は、なってやる。」

そこで、提案だ。ここで、何日か過ごした後、ここを抜け出す。貴様にも手伝ってもらう。

断るのなら、ここで殺す。貴様に、選択の余地はない。」

カイは、考える。

———どうしよう？手伝ったら、この城からでられるのかな？

カイは、条件を出すことにした。

「じゃあ、手伝ったら、ぼくをここから、だして。そしたら、手伝うよ。」

「わかった。その条件、のもう。交渉成立だ。」

ゼロは、小刀を、下ろした。

息を吐くカイ。

そして、ゼロに手を差し出した。ゼロは、素直にその手をとる。

二人は大広間に向かって、歩を進める。ゼロは、不思議に思った。

———なんで自分は、あんなことをしてまで、女王になることを拒んだんだろう？

でも、直感的に、オレは何かやることが、あるんじゃないか？

……今考えても、仕方ないな。

ゼロは、考えることをやめた。そして、顔を上げた。

歩を進めるゼロ。大広間からは、盛大な、音楽が聞こえてくる。

歩を進めることに、大きくなっていく。

まるで、それは大きな危険が、二人に近づいているように。

く歓迎会く（後書き）

な、長っ！！千文字超えちゃいました（汗）

あきないで、読んでくれると、いいんですけど。

「決死の脱走」

「…あのさ、ひとつ、聞いていいか？カイ」

ゼロは、軽くうわずった声で言った。カイは、

「なんですか？ゼロ様。」

と、静かに言った。

「これ、どういうことだ？なんかのどつきりか？」

ゼロは、目の前の光景が信じられなかった。あの後、カイに連れられ、大広間へきた。

だが、目の前に広がる光景は、想像とはるかにかけ離れていた。目の前にあるのは…

いまにも落ちてきそうな、ボロボロのシャンデリア。

床は、コケで覆われている。

壁は、つたで見えなくなり、天井まで続いている。

ところどころにある柱は、どれも朽ちかけている。

そんな所で、たくさんの人たちが踊っている。

でも、ゼロが驚いたのはもっと別の理由だ。

それは、ホールにいる人物が、ゼロとカイを除き皆、生きていなかった？

目玉が取れている者もいれば、骨が朽ちかけている者もいた。

全てに共通するものは、皆、骸骨で貴族の服を着ていることだ。

カイは、ゼロの手をぎゅっと握った。

「落ち着いてください。大丈夫です。僕の言うとおりに動いて下さい。」

でなければ、貴方の明日は、約束できません。」

ゼロは、カイの手を握り返した。

「はっ、こんなんで、オレが腰を抜かすとても？笑止、なめんじゃねえ」

ゼロは、口端をあげて笑った。カイは、ほっとした。

ゼロが、腰を抜かしてしまったらどうしようと思っていた。カイは、思った。

—————やっぱ、カッコイイ。ゼロさんて、頼りになる。

…て、僕は何を考えているんだ〜！

カイは、頭をぶるんと振るとゼロに指示を出した。

ゼロは、じっと聞いている。カイは、話終わると、ゼロの顔を見た。ゼロは、引き締まった顔をしている。カイは、再び思った。

———きれいな顔立ちだなあ。右半分ほとんど隠れてるけど。

…また、考えちゃった。僕っていつも人を見ると、分析しちゃうんだよね。

…もう、分析しちゃうか。えっと、眼が猫みたいな目だな。

身長は、166…て、とこかな。…僕よりおっきい。ちよつとくやしい。

それから、肌の色が異常に白いな。まるで、一回も光を浴びたことがないような。

でも、体つきが細いのに筋肉が、ついている。…やっぱ、僕って変人？

カイは、自己嫌悪してしまった。そこへ、ゼロが小声で言った。

「よし、行くぞ。」

カイが言ったのは、次のようだ。

この城は、約1000年前に滅びた王国らしい。だが、王国で殺された貴族は、

怨念が魂を呼び起こし、王と共に王国の復興を考えていた。

しかし、怨念で蘇った体は、魂は戻っても肉体まで戻らなかった。

王国は、あせった。肉体がなければ、世継ぎが産めない。それどころか、

王国は、ただの化け物でしかない。復興も望めない。いくら骸骨でも、限界がある。

そこで、自分たち殺されたとき、何人かが逃げ出した貴族を思い出した。

どこかで生き延びているとすれば、当然子供がいるはずだ。

古い言い伝えに、

『滅びた王国に。王族の血を引くもの、その血潮を一滴飲めば、

瞬く間に力が戻るだろう。

復興も夢ではない。』

という、ものがあった。王国は、まず使用人を探した。

今の姿で、外に出たら大騒ぎになる。だから、わざわざ使用人を探したのだ。

そこで、カイが連れてこられた。カイは、相手に幻術を見せることができる。

王国は、カイの特殊能力を使い、いろいろな子供を捕らえ血を飲んだ。

だが、どれもだめだった。限界が刻々と近づいてくる。王国は、再びあせった。

その時に、運悪くゼロを見つけてしまった。

王国は、ゼロから特異のオーラを感じた。王国は、ゼロの血を飲むことにした。

カイは、また犠牲が出るのかと、心を痛めた。カイは、これまでに何度か

子供を逃がそうとしたが、カイを信じて逃げようとする子供はいなかった。

だが、ゼロは自分から逃げようとした。カイは、考えた計画をゼロに話す決心をした。

それは、神の秘宝の欠片———花片^{カケラ}：カイの幻術で作ったものを渡す。

花片は、すべて集めると願いがかなうものだ。これを渡して、氣をとられている間に

逃げるといふ単純な計画だ。

ゼロは、そんな単純な計画で、逃げれるかどうか心配だった。

———一応あの太剣は持ってきたけど…。

うまく扱えるかどうか分からないのに。

それに、カイの幻術で作った花片…簡単に騙されてくれるのか？

まったく、不安要素たっぷりだ。……はあ。

心の中で、ため息をつく。それから、息を肺にいっぱい吸い込んで一気に吐いた。

そして、カイの言われるとおりに動いた。玉座に着くまでに、

ゼロは「うん」としか言わなかった。

とうとう玉座の前まで来た。カイは、ゼロの横顔を見た。ゼロはすました顔をしている。

カイは、ゼロの慣れの速さに驚いた。カイは、手はずどおりに花片の偽者を王に渡した。

王は、カイの説明を聞いた。カイの説明を聞き終えた王は、二人を骸骨の奥の眼で

見つめた。そして、

「コンナモノデ、我々ヲ欺クコトガ出来ルトデモ？ ナメラレタモンダ」

王の手の中で花片の偽者が潰れた。そのとたん、ホールで踊っていた骸骨達が、

一斉にゼロとカイのほうを向いた。王が口を開く。

「ソノモノ共ヲ殺セ」

ゼロは、ドレスに隠していた、大剣を取り出した。まず、玉座に座っている王を、

大剣で吹っ飛ばした。王は、柱に叩きつけられた。ゼロは、王の体から青く、

丸いものが出て行くのを、眼の片隅で見た。ゼロはまっすぐ前を向く。

「突っ切るぞ!!」

ゼロは、大剣を構えるとカイの手を握ると、骸骨を大剣でなぎ倒しながら進んだ。

「うわぁ!」

カイが転ぶ。

「お前、今日はよく転ぶよなっ」

ゼロは、次々と襲ってくる骸骨をなぎ倒しながら、カイを起こす。

「あ、ありがとう」

「早く走れっ」

カイは、急いで立ち上がり走った。ゼロは自分が最初に居た部屋のドアを開ける。

その時、一匹の骸骨がゼロに襲い掛かる。

「ぐっ くそがあっ!!」

大剣を、骸骨に向かって振り下ろすゼロ。その背中には、血がたっぷりつついている。

カイは、ゼロに手を貸すと、部屋に入り鍵を閉めた。

「これで、しばらくもちます。ゼロさん、傷を見せてください。」

傷を見ようとカイが近付くと、ゼロは手で払った。

「手当てなんかなくていい!!」

「でも、早く手当てしないと化膿して…」

「うるさいっ死んだら、んなもん関係なくなるんだよ!」

ゼロは、立ち上がると小窓を大剣で割った。

「…こっから逃げるぞ。」

カイは、眼を見開いた。

「な、何考えて…」

「大丈夫だから。心配すんな。」

「『心配すんな』って、今ゼロさん外見たでしょう！ここは、？空島？なんです！

ここからどうやって、逃げる気なんですか？」

ゼロは、当然のような顔をしていった。

「飛ぶ」

「無理です！！」

カイは即答した。

「そんな事したら、死んじゃいますよ！」

ゼロは、『どうでもいい』という顔をした。

「それより、オレがこの部屋にいたとき、花火が見えたんだけどさ、それって、この？空島？が、花火が届く程度の高さにあるってことだろう？」

「だったらいけんじゃん。」

カイは、なるほどとおもった。しかし、すぐにだめだした。

「それでも無理ですよ。花火がいったいどこまで打ちあがると…」

ドン！ ドン！ カリカリ カリカリ…

カイは、ぱつと後ろを振り返った。骸骨たちが、ドアをこじ開けようとしている。

「話し込んでいる暇はなさそうだ。」

ゼロは、にやりと笑うと、カイを小脇に抱え、小窓から飛び降りた。

く決死の脱走く（後書き）

さて、お話はここから始まっていきます。

え？ 始まりがおそいって？ すいません（汗）

まあ、黙って二人の冒険を見ていてください。

く落下！落下！落下！く

「つうわあああああああ！！！！！！」

ゼロとカイは、真っ直ぐ落ちていく。絶叫しているカイに対し、ゼロは無言だ。

それどころか、楽しんでいた。

———耳元で風が鳴る。…なんて心地いいんだろう。

風の心地よさを感じたゼロは、暖かい気持ちになった。

———さて、そろそろ？アレ？が…。！ あった。

ゼロは、柄から大剣を引き出す。そして、それを建物に突き立てた。

ガガガガガガ！！

「うっくっ！」

「うぎゃあ！」

いきなり止まった衝撃で、カイがゼロの脇からずり落ちた。

「ぐっ なにしてんだ！」

間一髪でゼロがカイの手を掴んだので、落ちなかったが…。

「カイ…」

「なな、なんですか？」

「…スマン」

ゼロは、ポツリといった。

「え？」

次の瞬間、建物がビキビキと音をたてながら、壊れていく。

「スマン…落ちる。」

「もう、いやだあああああああうわあああああああ！！！！！！」

二人は、落ちる落ちる落ちる。

そして、

バツツシャアアアアアアアアン！！！！！！

落ちた。

湖に。

～沈没～

「う……くそ、何してんだ。早く立て。」

ぐったりしているカイの腕を、岸边まで引っ張るゼロ。

しかし、自分の着ているドレスが重すぎて、思うように動かない。

——くそ、岸边まで……あと……何……メ……トル……なん……だ……？

意識が遠くなる。

思考が——止まる

力が——抜ける

ゼロの体が傾く。

——そう……いえば……何でオレ……こんな……所に……いるんだ……？

なんか……どうでも……いいや……。

ゼロの思考回路は、完全に止まった。

そして、ゼロとカイの体が、ゆっくりと沈んでゆく。

その二人を助ける少年がいた。

夕日を思わせる金色の短髪は、あらゆる方向にはねている。

膨らみのある麻のズボンに黒いベストを着ている。

名をラオといった。

ラオは、沈みかけた二人の服を引っ掴むと、岸へと向かった。

く沈没く（後書き）

さて、二人はどうなる？

ゝ能力ゝ(前書き)

湖に落ちた二人を助けた少年――――ラオ登場!!

能力

…ヒタ…ヒタ…ヒタ…ヒタ…

ゼロは近づいてくる足音で眼を覚ました。

———…ん？なんだ、ここ。暗くて、何にもみえねえ…。

この足音…ガキのものか。カイはどこだ？

音をたてないように俊敏にベットから降りると、手探りで周囲を確認した。

———これ…なんかの毛皮か…？フワフワしてる。それに、

この壁…骨だ…。…これが獣の骨である事を祈るぜ。

ゼロはそう思いながら、目を凝らした。

足音が近づいてくる。

暗闇になれてきたゼロは、もう一つのベットに気付いた。

そこには、カイが寝ていた。

「おい、起きろ！起きろってば！」

「う…ん…」

ゼロはカイを起こそうと小声で怒鳴ったが、なかなか起きない。

足音が止まる。

ゼロの動きも止まる。

キキイ……………

ドアが嫌な音を立てながらも開く。明かりが部屋の形を作り出す。

「おお、何だ起きてたのか。」

ラオは両手と頭に陶器に入った粥を持っていた。

ゼロは、身構えることを忘れて、粥に眼が行った。

お腹が空いていたのだ。

ラオはその様子を見て、フツと頬を緩めた。その表情にゼロは何か懐かしいものを

感じた。

「フフ…。腹が減ったんだろう…。これを喰え。」

ラオはゼロに粥を渡した。粥を夢中で食べるゼロを、ラオは父にも似た表情で

見ていた。

その時、

「ブニャアッ！！！！」

奇妙な声を上げて、カイがベットから落ちた。

「アハハハハハ！！　＞ブニャアッ！＜って、お前猫かよ！！

しかも、はは、ベットから、ククク、落ちるって、ひひひひ……！」

腹を抱えて笑うゼロは必死に笑いを堪えようとするが、無理だった。

「ククク……は、腹いてえ……フ、クククク……ハハハハハハ！！！！
！！！！」

肩を震わせ、笑いを堪えていたラオも、とうとう堪えきれずに笑い出した。

カイはそんな二人を見て、キョトンとした。

「あれ？　いつの間に仲良くなったの？」

その言葉を聞いて、初めてゼロは我に返った。

「そーいや、お前誰？」

「そういう段階すっ飛ばして二人で笑ってたの！？？」

カイは今更！？という眼でゼロを見ている。

「ほんっと、お前らにはつくづくびっくりさせられる。」

ラオは、まだ笑いながら言った。

「俺はラオ。一介の狩人だ。」

簡単に自己紹介を済ませると、まだ持っていた粥を配った。

「お前：よく、笑いながら落とさなかったな：」

「はは、バランス力には自信あるんだ。」

ラオはまた、あの妙に大人びた笑顔を見せた。

「そう言えばよ、この壁、骨だよな？ 何の骨だ？」

ゼロは何故かその笑顔を見たくなくて、話を逸らした。

「ああ、それ？ それはな、今まで狩った動物の骨だ。肉は食っても骨は喰わねえだろ？」

だからさ、そうやって活用してんだ。：こうゆう風に。」

ラオは、立ち上がると、懷から骨を取り出した。そして、その骨を壁にそっと当てた。

すると、煙を上げながら壁が解けて行き、そこへ骨が溶け込んでいく。

「お分かりいただけた？」

「分かるか！」

ゼロは吠える。一方カイは何が起きたか理解していない。

「え？ 今…え？ 骨が…どうなったの？」

「おまえら？ 魔術？ って知ってる？ たぶん使えると思うよ？ 二人とも。」

二人は顔を見合わせた。

「ああ、お前が城で使ってた。」

「あ、ゼロさんが城で使ってた。」

同時にあの城の事を思い出した。

しかし、ゼロがカイの言葉に反対した。

「ハア！？ オレがいつ？ 魔術？ を使った！ 使ったのはお前だろう？」

カイはすまし顔で言った。

「骸骨に囲まれた時、ゼロさん、どんどん倒していったじゃないですか。」

アイツ等、普通に攻撃しても、死なないんですよ。

それに、なんとなく感覚で分かるんですよ。ゼロさんが使っていたのはたぶん

《サイコキネシス》だと思います。能力によってアイツ等に何らかの影響を

及ぼしたんだとおもいます。

例えばぼくは、《念写》です。

それから、ラオさんは《パイロキネシスト》ですね。」

ゼロはキョトンとしている。

「オ、オレが？　あり得ねー。だってオレなんかした覚えねえもん。」

首をブンブン振るゼロ。

「あのですね、無意識で使っちゃうときもあるんです。」

ラオは、さて、とでも言うように膝をパンと叩いて、立ち上がった。

「さて、なんか話がすつげえ脱線しちまったみたいだから、

話を整理…ていうか、最初から順序立てて、はなそーぜ。」

ゝ能力ゝ(後書き)

うん、訳分からん!!!

進化

「ほく、そんな事が頭上であつたとは…驚きだ。」

二人が落ちてきた経緯を聞いたラオは眼を大きく見開いた。

「それはこっちのセリフだ。俺等が死にかけていただと!？」

そして、カイは一回起きて、頭をぶつけて寝込んだだと!？」

ゼロが眼を吊り上げる。

カイは後半部分を耳をふさいで聞かないようにしていた。

「ああ、沼に沈んでところで、窒息しかけてたし…。

危なかった。」

ラオはあえてカイの事は言わなかった。

カイは額に汗をじんわり掻いている。それを手の甲で拭うカイを横目で

見ながら、

———なんか妙だな…。

そう思った。

———何か…喉からせりあがってく…う！

「う…ゲホッ！ ガハッ…！」

激しく咳き込むゼロ。

「ぜ、ゼロさん！？ どうされたんですか！？ ゼロさん…！」

カイはゼロの背中をさすりながら顔を覗き込む。

「？ カイ、離れろ…！！」

何かの異変に気付いたラオがカイの腕を掴んで引き離す。

「ウウ、グ…ウアアアアアアアアアア…！！！！」

一瞬して、辺りが光に包まれる。

?―――よく、来たね…。

ゼロはゆるゆると眼を開けた。辺りは真っ白で何も見えない。

ただただ、不思議な声が聞こえてくるだけ。

?君には…やってもらいたいことがあるんだ。?

不思議な声の主は続ける。ゼロは何故か黙って聞いていた。

?君が二度生まれて来るのを…何万年も待っていたんだ。?

―――二度…? 何万年?

頭を働かせようとしたが、どういふことか、なにも考えられなかった。

?君は、僕のカケラ…?花片?を集めてほしいんだ。君は、

自分が何者か、分からないんだろう? 僕の?花片?を探すうちに

見えて来るよ。真実も…。何もかも。一つ目の…カケ…ラは…

?嘆きの古城?…だ。早く…集め…て。奴等より…先に…。?

―――?奴等?? ?嘆きの古城?…?

ゼロは消えていく不思議な声…?花片?の声を聞きながら、意識が遠くなっていった。

「う…ゼロさん…眼え覚まじまぜんよお…。」

「泣くな！ みつともない！ 死んだわけじゃない。」

「でも、こんなになっでまずよ？ なんなんですかこれ？」

ゼロは「うるせえ！！」と言って起きようと思ったが、起きられなかった。

—————こ、腰の少し下が痛え…年寄じゃねえぞ、オレ。

ゼロは腕にグツと力を入れ、起き上がった。

「あ…ゼロざあああああん！！」

起き上がったことに気付いたカイがゼロの首っ玉にかじり付いた。

「おわわっ！！　おい、離れろ。」

ゼロはカイを引きはがそうとしたが、無駄なようだ。

ラオはその様子を見て、苦笑する。

「まあまあ、させとけよ。お前の事すっげえ心配してたんだ。

…に、しても…見事だな。」

ラオはまじまじとゼロを見る。状況を理解できないゼロは首を傾げた。

「何が？」

「…気付いてないのか…。」

「だから、何が!？」

「その耳と尻尾。」

指をさしながら答えるラオ。それに対して、ポカンとなるゼロ。

恐る恐る頭に手をやると何やら三角の形をした、フワフワした物が。

そして、さっき痛いと思っていた腰の少し下を触ってみると、

やはり、フワフワした物が。

ラオがゼロの前にどこからか大きな鏡——もちろんゼロの全体が映る——を

持ってきた。そこに映っていたのは——

髪同様に銀色の耳と身の丈もある尻尾。しかも、ただでさえ長かった髪が、

自分の身長の数倍はあろうかと思うほど長く伸びている。

服は白く、足を隠すほど長く、袖口も大きい。

その姿はとても神々しく、思わず見惚れてしまう美しさである。

「な、何だこれは————！！！！！！」

その美しい姿には似つかわしくない言葉づかいが、辺りに響いた。

ゝ進化ゝ（後書き）

えっとですね…今回のお話で、ゼロが美しく変化を遂げちゃうんですけど

ええ、勢いで書きちゃいました。

く一休みく

「はあ〜……。ふざけんなよ。何の冗談だよ。」

ゼロはブツブツと悪態をついている。紅色の瞳を瞼の下に隠し、あぐらをかき、その上に肘をつき額を押さえている。

「…少しは落ち着いたか？」

ディンブラを持ってきたラオが聞いてくる。その後ろからディンブラを

すでに飲み始めているカイが来た。

「美味しいですよ、これ。僕、紅茶あんまり飲まないんですけど、
？ディンブラ？って、フルーティーで、飲みやすいです。」

そう言って笑うカイの頬には、涙の跡がある。

ゼロが美しく変貌を遂げる前、ゼロは完全に意識が飛んでいて、

呼んでも、叩いても、起きない。カイはたまらず泣いてしまい、

ラオはそれを慰めた。ゼロが意識を取り戻して、泣き止むかと思いきや、

今度は、安心でまたもや声を上げて、泣き始めた。

「さて、ゼロ。気を失っている間：何を見た？」

床にどっかと腰を下ろし、ゼロを真正面から見た。

ゼロは少し戸惑った。少しの間にいろいろありすぎたせいもあるし、

何より、あの不思議な声がゼロの中で渦巻いていた。

そして、ラオがなぜ自分が気を失っている間、

何かを見た：いや、聞いたと分かるのか。

ゼロがそれを問いただす前に、ラオが答えた。

「顔見りゃ分かるよ。お前、すぐ顔に出る。：ほら、今だって、

『なんかむかつく』って、顔に書いてるぞ。」

ラオの言うとおり、ゼロは『なんかむかつく』と、思っていた。

眉を寄せ、口をへの字に曲げている。

「で、話してくれるか？　なにを見たか。」

ゼロは首を縦に振った。ラオから貰ったディンブラの入ったカッ
プが

微かに震えている。

――…怖い。何が怖いのか分からないが…。何か…
？誰か？を

オレは恐れてる。

ゼロは、直感的にそれを感じた。

ラオはその様子を見て、後にしようかと、言おうとしたが、

ゼロが口を開いたので、口を閉ざした。

ゼロは聞いたことを話した。全て、不思議な声の事も、？花片？の事も、

そして、？嘆きの古城？の事も。

すっかり話してしまった後、ゼロはホッと息をついた。

カイはその時、何故かゼロがとても幼く見えた。

いつもの――と、言ってもまだ、半日過ごしたただけなのだが――
闊達さが

失われている。

カイは、妙に落ち着かなくなった。

――…なんか…ゼロさんがいつもと違うと、こっちまでな
んかおかしくなる。

その時、ラオが立ち上がった。

「…やっぱりおかしい…。」

顎に手を当て、首を傾げた。

「何が？」

「なにがですか？」

ゼロとカイはほぼ同時に聞いた。一瞬、二人は顔を見合わせた。

しかし、ラオの言葉を聞いた瞬間、二人はラオの顔を見た。

「？嘆きの古城？なんて物、聞いたことないんだ。」

その部屋に、今回初めて、静寂が訪れた。

ゝ一休みゝ（後書き）

なんかだんだん本題に近づいてきましたね…
先を書くのが、楽しみです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2833/>

七つの花片

2011年10月7日02時40分発行